京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十八卷 第一號

昭和十四年一月

經濟論叢 毎月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

（禁轉載）

目次

作田莊一博士肖像……卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……一
日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……文學博士　米田庄太郎……三
東亞民族の形成……文學博士　高田保馬……三八
日本經濟史研究の發展……經濟學博士　本庄榮治郎……五六
理論學としての日本經濟學……經濟學博士　谷口吉彦……七四
產業組合の耕地管理……經濟學博士　八木芳之助……九二
印度に於ける國民的產業能率の遲滯性に就て……經濟學士　大塚一朗……一〇八
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……經濟學士　中川與之助……一二八

資本主義と支那事變……經濟學士　柴田　敬……一四二
明治時代農村手工業の消長……經濟學士　堀江保藏……一六二
我國に於ける預金通貨統計の發達……經濟學士　中谷　實……一七八
保險思想の發展……經濟學士　佐波宣平……一九三
歴史學派に於ける國民經濟の概念……經濟學士　白杉庄一郎……二二一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……經濟學博士　石川興二……二三七
國事資金法の提案……經濟學博士　小島昌太郎……二四九
農山漁村財政の五箇年記録……經濟學博士　汐見三郎……二六九
支那の社會成層……法學博士　財部靜治……二八八

印度に於ける國民的産業能率の遲滯性に就て

——東亞的國運經濟論の一課題として——

大塚一朗

一　序言

今日、英帝國範圍の一構成分子として獨自の政治的統一體を成せる印度は、ヒマラヤ山脈の南方に印度洋に突出して展開する巨大の一大陸的半島を中心に、其の領域の廣袤は約四六八萬平方粁即ち全亞細亞洲の約一割を占め[1]、人口は一九三一年の國勢調査に據つて約三億五千萬即ち[2]日本内地人口の約五倍を包むところの東亞の一重要地帶である。而して、天然がそこに與へたる産業的諸富源と並びに多年の間に形成されたる所の資本的富とが又其の額、決して乏しからぬものを有してゐる。然るに、現在印度は世界の産業界に於て未だその國内に包容する基本的生産諸要素の力に相應する地位を獲得するに至らず、大衆の經濟的生活狀態もまた一般に極めて低位劣惡の水準に放置されてゐる。印度の經濟が今もなほかくの如き段階に彷徨してゐる所以に就ては、研究者の方法論的立場の相異に基いて、少くとも實際上はそこに種々なる見解の成立が可能であると思ふ。しかし、私はこゝでは一應それが主として今日迄の印度に於ける國民的産業能率の甚しく遲滯してゐることの一點に還元することが出來るとの方法論的見解を取るものである。

こゝに國民的産業能率とは國内に包容されてゐる自然的、人的及び資本的資源をば、國家及び社會の爲の富を獲得する目的に向つて合理的に培育し利用する上の國民的能力のことである。勿論個々の勞働の生産性のことでもなければ、又一經營乃至

1) 内閣統計局、列國々勢要覽、昭和12年、7頁以下の數字に依る。　2) 1931年2月26日の國勢調査に依れば、全印度人口統計は351,399,880人にして、1921年の國勢調査の結果に對して10.2%即ち32,513,900人の增加を示してゐる。(The World Almanac, 1938, p. 586.)

一企業の經濟性乃至收益率のことを指すのでもない。とにかく一國の經濟的實力は、根本に於て、國内に包容されてゐる生産諸要素の量の大小よりも寧ろ一層多くは、それらの諸要素を生産目的に向つて合理的に組織づけ培育し利用する國民的能力に依存してゐるものである。かくて、一國の經濟的更生乃至發達は實に第一に其の國に於ける國民的産業能率の進歩改善に懸かつて存するといはなければならぬ。私は此の小文に於て今日の印度に於ける國民的産業能率を繞る諸問題を究明しやうと思つてゐる。

學國、支那問題に努力と關心とを集中してゐる時局のさ中に、印度の問題を取扱ふのは、或は迂濶遊閑の學事たるの譏を免れ得ぬかに似てゐやう。しかし、人若し時局の核心が究極に於ては東亞一帶の更生に係はるの本義に思ひを致さば、今日の場合本文に於て取つた如き觀角から印度の問題を考究することもまた、學徒が特に時局に報國の一事を志す所以の意味を有することを認められるであらうと思ふ。況や國民的産業能率は一般に國家の隆替を決する基本的契機の一である。然らば、本文に於て究明せんとする問題は直接には印度の隆替を繞る事柄に關してゐても、苟も東亞的國運經濟論研究の一課題を成すのであり、從つてそれは又今日の場合、我が國自らの立場に對しても決して餘りに迂遠の關係にあるものとはいへないのである。

以下項を分ちて、印度に於ける生産的諸要素即ち土地的資源、人的資源及び資本が未だ充分に其の潜在的能力を發揮し得ずして、それらが多分に荒廢浪費の狀態に放置されてゐることの事實的諸關係を、順次明かにして行きたいと思ふ。

二　印度に於ける土地的資源の浪費

ここに土地的資源とは、廣く、人的努力を俟たずに與へられ生産要素として利用され得べき自然的對象を意味する概念である。これら自然的對象を直接に培育利用する産業活動は普通に農業、林業、水産業、鑛業の四大部門に分けられる。尤も鑛業は又工業とも密接に關聯してゐる。

（一）農業に依る土地的資源の利用狀況。印度帝國內土濟侯領域の大部分は農業統計を作成してゐないから、これを除いて、一九三一年の國勢調査に依據し、帝國領域の五七％を占める中央政府直轄英領地約六億七千萬英反（約二億六千八百萬町歩）のみについて見るのである。右の中約二二％卽ち一億四千八百萬英反は耕作不適地とされてをり其の他に約一三％卽ち八千七百萬英反の森林地がある。殘餘の約六五％卽ち四億三千二百萬英反が可耕地である。然るにそれの三六％に當る一億五千五百萬英反は未墾地又は放棄耕地として荒廢狀態に放置されてゐる。かくて、常時耕作の用に供されてゐるのは僅に全可耕地の約五十三％に當る二億二千八百萬英反に過ぎないのである。其の他に約一一％卽ち四千九百萬英反の休閑地が存してゐる。[3] 印度の可耕地帶は一般にいへば本來地味も大いに豐饒で且つ氣候についても天惠を有し、可耕地の大部分は平均して二毛作に適してゐるものである。だから、今其二毛耕作を實施するとならば、可耕地面積はいはゞ、今日普通に一毛耕作の行はれてゐる前述數字の面積の二倍卽ち八億六千四百萬英反になる譯である。然るに、現狀に於ては、右の割合で算出され得べき耕作面積が合計二億六千萬英反に過ぎないといふことでは、全直轄英領地域內可耕地面積の七〇％が利用されずに放置されてゐる譯である。農業に於ける土地的資源の利用狀況は、勿論ただ外延的に可耕地面積に於ける實際耕作面積の割合を見るのみではこれに關する判斷の全きを得ることは出來ない。更に進んで其の耕作方法の內容をも檢討しなければならぬ。しかし、此の點は後出の資本利用狀況にも關係して來ることであるから、ここではただ其の耕作方法の內容に於ける土地的資源利用狀態に關係した若干の要點を指摘するに止めて置かう。卽ち第一に種子及び作物の種類に關する適地性、經濟性に關する合理的選擇も未だ極めて不充分であり、第二に農耕用具は

3）日印協會、印度産業貿易狀勢、昭和10年、143頁以下參照。

數千年來の傳統を其の儘の甚だ原始的固陋なるが一般に使用されてをり、第三に而して印度の農業につき最も重要な點であるが、今日印度では農耕用家畜卽ち多くは牛及水牛であるが、それの糞が殆んど全部農家の燃料に使用されてゐて而も人造肥料を購入する資力も無き儘に土地は徒に掠奪耕作に供されて地味は益々瘠せ衰へ行き收獲力もまた從つて一般に甚だ低くなつてゐる。

(二)林業に於ける土地的資源の利用狀況。印度は林業に關係の方面から見ても氣候の條件、地理範圍廣がりの條件等に於て極めて天然の惠與を受くるところが大きいのである。然るに實際に於ては、長年に亙る濫伐[4]と、計劃的植林事業の遲滯との爲に、(註一)今日全印度領域內に於ける商業的森林地は全森林適地の約四割に過ぎない有樣であり、且又年々の伐採も年々の自然成長の三分ノ一に過ぎないと見られてゐる。彼此綜合して、印度の森林關係的地的資源の現實的利用は潛在的能力の約二五%に止まり、殘餘は徒に廢棄の狀況にあると推定されてゐる。

(註一) 植林事業は今日全然それが放置されてゐる譯ではなく、一八五五年以後印度總督による奬勵があつて漸次進捗して來てゐるとも報告されてゐるが、(日印協會、前揭、一五四頁)しかし決して未だ全印領域について顯著なる普及發達がある譯ではないのである。

(三)水產業に依る土地的資源の利用狀況。水產業の方面から見たる印度は直轄領ベンガル、ビハル・オリツサ、マドラス諸縣に於ける內陸漁業適地を始めとして凡そ米國に次いで大規模の內陸漁業適地を有し、其の他に近海遠海に廣大な鹹水漁業適地を有してゐる。近代式科學的技術を以て此の莫大なる水產的資源の培育利用に努力するなら、實に無限の天惠的豐庫を開くことが出來るのである。然るに、今日印度の水產業は此の豐庫を開いて全印度魚食人口に對して水產食品を供給する爲に天然惠與の潛在的資源力を未だそれの三分の一程も現實に利用し

4) 三菱經濟研究所、太平洋に於ける國際經濟關係、昭和12年、284頁。

てゐないと推定されてゐる。

（四）鑛工業に依る土地的資源の利用狀況。此の方面に於ては、印度の産業的繁榮の爲に先づ著眼すべきものとして河水がある。河水は交通運輸用以外に現代科學の力を以てこれを電源用及灌漑用に利用し得るものである。就中電源用としての河水の現代的意義は極めて重大である。此の點に於て印度は二千七百萬馬力に達する潛在的電源能力の河水を有して米國に次いだ天惠の地位にあると推定されるにも不拘、今日現實では其の中の僅に約二十五萬馬力を電源的用途に利用してゐるに過ぎない。實に潛在的能力の一%にも達せざる程度である。これを瑞、獨、日、佛、米、加等諸國に比較してそこに水力電源の利用上實に著しき遲滯がある。

河水以外に、印度に惠まれたる鑛業的資源は又甚だ巨大である。就中金、鐵、石炭、石油等が著しきもので、其の他にマンガン、銀、鉛、亞鉛、銅、錫、タングステン、雲母等に就ても輕視し難い埋藏量を有する事が明かになつてゐる。然るに、それら諸鑛業的資源の開發は近時漸增の傾向を見るとは雖も、なほ未だ決して其の發達充分なりとはいへない狀態である。例へば、石炭は可採炭量推定少くとも二百億噸といふに、一九三一年度の統計に依れば採炭量僅に二千萬噸で、同年の我國內地鑛の產額の三千萬噸に比して大いに劣つてゐる有樣である。印度に於て最も注目すべき鑛業的資源は鐵鑛である。それは埋藏量約三〇億噸と推定され[5]米、佛に次ぐ地位を持つといはれてゐる。然るに其の現實採掘額は近年卽ち一九三四年に於てなほ僅に年產二百萬噸に足らぬ程度で、これを米、佛、英、獨等主要製鐵國に於ける採掘狀況との國際比較の上で甚しく低位にある。石油もまた埋藏推定量十億バレルに達するといはれ乍ら、其の國內產額は國內需要を充し得ずして、最近でも一年に二億ガロン以

5）三菱經濟研究所、前揭288頁參照。

上の輸入を見てゐる。[6]

以上各産業部門に分ちてそれに依る印度の土地的資源の利用について現狀の概要を窺つて來たのである。それによつて吾々は、今日の印度が天與の土地的資源の潜在力を其の國家的富と社會的福祉との爲に現實に利用してゐる程度がなほ極めて低く、いはゞそこに巨大なる經濟的浪費が犯されてゐることを知つたのである。抑〻かゝる事態の依つて來る原因が何であるかは重大な問題でなければならぬが、それは以下に見る人的資源と資本との利用狀況にも關係するところ深いといふ事情もあり、旁々以て今は全くその問題に觸れないのである。

三　印度に於ける人的資源の浪費

一般に一國の産業的發達卽ち生産力の擴充强化は其の國民に於ける人的資源の培育利用の狀況に制約されるところ頗る重大である。人的資源の培育利用は勿論一國に於ける道德學藝宗教等文化的價値百般の創造發達を制約するけれども、ここでは專ら國民經濟的價値の創造過程に於ける根元的要素としての人的資源の意義に著眼するのである。此の見地から見て印度は今日まで其の人的資源につき實に甚大なる浪費を犯してゐる。かくて、支那に次いでの其の巨大人口は世界産業界に於ける印度の地位を高からしむべき積極的要素として作用するよりも、寧ろ印度の經濟的發達に對する重き負擔になつてゐる。産業的見地から見た印度に於ける人的資源の浪費といふ本質的事象は種々なる現象形態に於て展開してゐるので、以下それら箇々の方面につき順次にこれが內容を檢討して行かう。

6)　三菱經濟研究所、前揭287頁參照。

（一）國民的健康狀態の著しき不良性。國民的健康狀態の不良性は一般に乳兒期乃至早期死亡を多くして人口構成に於ける生産期人口の割合を低下し、(註二)國民の智力道德力を弱め、生産期年齡の人口の氣力體力を萎靡せしめる等の諸般の關係から一國産業の發達に對して重大なる障碍となる。殊に印度に於ては其の國民的健康狀態の不良性については、一般の體位低下に依る右擧げた諸障碍以外に、癲狂、聾啞、盲目、癩患となり、生きながらの屍として生産界より離脫してゐる人口數も少くないのである。

（註二）一般に生産期年齡として認められる十五歲—五十九歲の人口の總人口に對する割合は一九二一年の統計で五六％である。これは老年期人口の大なるに依るのでなく早期死亡が過多なるに依る。但し我國の人口構成に於ても、昭和五年の國勢調査によれば、（內閣統計局、前揭三一頁參照）前記生産期人口數の割合は、右印度の場合と同位である。尤も人口構成の全般的狀態は同じではない。

早期死亡過多の現象は印度に於ける人的資源の浪費を示す一大特象である。印度人の平均餘命は男女合併平均して生後廿五年弱になつてゐる。これは列國中の最低位で、英、米、佛等の約五十年なるに比較して、其の半以下に當る。(註三)畢竟印度は列强諸國と同一規模の人口を維持する爲に、後者に比較して二倍以上の國民的精力を費してゐる計算になる。

（註三）我國の近年では平均餘命は生後約四十五年になつてゐる。矢野、白崎共編、日本國勢圖會、昭和十三年、四三三頁以下參照。

印度では生後十五年迄に出生者一〇〇〇人につき約五〇〇人の死亡があると報告されてゐる。ここに印度に於ける生産期人口數の著しき低率化の原因が存してゐる。

印度に於ける早期死亡の過多が、一國人的資源の浪費たる所以は具體的には更に種々の方面からこれを觀察しなければならぬ。

第一に、大體十五歳以下の年齢期は人生の負債期として國民經濟的繁榮に對して何等積極的貢獻を致す要素とならぬからこれを夫々平均餘命から差引けば、印度人は列强諸國人が生れて三十ケ五年の活動期を有するに對比し僅に約十ケ年の活動期を持つに過ぎないのである。

第二に、早期死亡が母性に負はしめる浪費的負擔の方面より考察しなければならぬ。印度の出生率から計算して印度には一ケ年間に約一千萬人の母性の產兒的活動がある。故に、印度人の平均壽命が若し列强並なら人口維持上に右の母性的活動は約五百萬人を以て足る譯である。(註四) 母性に對して與へる兒女死亡の悲嘆損失は勿論單なる經濟的物質的計慮を超越するものがある。しかし、同時に懷妊、哺乳、育兒の過程が母性的女子に對して負はしめる經濟的有形的負擔が兒女の早期死亡によつて全く浪費に歸せしめられるに因る國民經濟的損失も亦極めて重大である。一產兒的母性活動が假に六ケ月を要すとすれば、印度に於ては先に述べた數字と併せ計算して、一ケ年間に約二百五十萬人の女性が空しく生產的、創造的仕事から手を離してゐるといふ結論を生ずるのである。(註五)

(註四) 印度の乳兒(滿一歳以下)死亡率は一九三三年の調査報告に依れば一〇〇〇人につき二〇〇—二五〇人に達してゐる。我國では近年大體一〇〇〇人につき一〇〇人內外であり、英蘭及ウエールスでは一〇〇〇人につき約六〇人である。矢野、白崎共編、前揭、四三二頁參照。

(註五) 印度に於ける高率の乳兒死亡現象が基くところの原因は深く且つ廣い。それは一般的高率死亡を規定する諸多の社會的、經濟的、自然的諸原因の他に、特に住民の衞生的文化的水準の低位なる爲め生兒に對して極めて初步的な產兒哺育の手

當さへ施されてゐないといふ點にも起因する。宮城駿介譯、壓制下のインド昭和十三年一八八頁及び三菱經濟研究所、前揭、二七一頁等參照。なほ後出の極端な早期結婚が其の一因を成してゐる。

印度に於ける早期死亡率過多、廢疾者の大規模發生、一般的體位の低下を齎す原因は深く檢討しなければならないが、ここではただ直接の契機として惡疫の流行と一般的營養不良との二つを指摘してをかう。[7]

今日迄印度に於ては恒常的にコレラ、天然痘、インフルエンザ、赤痢、マラリヤ熱等の惡疫が流行してゐる。就中マラリヤ熱は印度に於ける普通の疾病中特に注意すべき禍害を生じてゐる。たとへば一九二七年に於ける人口千人當り死亡二四・八九件中一四・二九件は大體マラリヤ熱に原因があるといはれてゐる。而して、此の種疾病は印度の各地方、各職業、各階級の人口を犯してをり、其の爲に空費される活動日の量は測り知るべからざるものと推定される。マラリヤ熱が印度に於ける人的資源の浪費を生ずる現象は多方面に起る。第一に死亡によつて人口を奪ひ第二に治癒後國民の精力乃至勞働能率を破壞し、第三に恒常的のマラリヤ熱流行が各箇の大經營をして常に高率の豫備的從業者の雇入れを餘儀なからしめる。

惡疫流行の他に、印度では人口の大多數が平常的の營養不足乃至饑餓狀態にある。人口の大多數が極端なる、危險なる貧困狀態にあることは實に今日迄の印度經濟の一大特徵である。[8] 人口の大多數が陷つてゐる饑餓的營養狀態については、屢々全印度の農業を襲ひ又例年孰れかの一部地方を犯す大小の凶作現象が勿論一つの重大要因を成してゐる。(註六) しかし、凶作はともかく臨時の現象である。それよりも一層重要なのは恒常的に存在する一般的食養不足の極貧狀態である。(註七) 卽ち印度に於ては食糧の國內消費が總人口必要量の三分ノ二に過ぎないのである。

7) 日印協會、前揭17頁參照。
8) 印度に於ける生業者の約70%を抱く農村大衆の極貧狀態については、名和統一、日本紡績業と原棉問題研究、昭和12年491頁參照。

（註六）地理的關係から、六―九月の間に多量の雨を齎す南西モンスーン（年雨量の約九〇％を齎す）は印度農業にとつて重要條件である。然るに五ケ年のうちに一ケ年は雨水少きことあり、十ケ年に一ケ年は旱魃に惱まされなければならぬ環境にあること、且つイギリス支配下の諸政策の影響で農民の抵抗力は頗る薄弱にされてをり、極端な零細農の立場で、生産方法の改良の如き全く手がつかぬ。（其の零細農の資産狀態については、外務省調査部、印度民族史、昭和十年、二九八頁以下參照）。かくて、一度凶作來れば餓死するもの數十百千萬に及び、夥しき家畜も斃死する。東亞經濟調査局、イギリスの印度統治、昭和十年、九〇頁以下參照。

（註七）「ベンガルに於ける農民の一大部分は現在、鼠でさへも五週間とは生き得ないやうな食物で生活してゐる」宮城駿介譯前掲一八八頁。

（二）國民大衆の無教育無知性。印度の國民大衆に於ける驚くべき程度の一般的無知無學無教育は印度の人的資源浪費の一重要方面である。右の狀態に基く國民的活動能力上の損失はこれを正確に測定することが困難であつても、蓋し其の額の莫大に達すべきことは、大凡推測され得る事柄である。

印度人口に於ける識字者數の割合は、人口總體について一九二一年には七％、一九三一年には九・三％であると統計が報告してゐるけれども、これはただ形式上の事實であるから實際上はなほ右の比率の半分以下であらうといふ。[9] 實に印度は教育の水準について世界中で最も遲れた國であつて、全く諸列强國との比較に堪えないのである。（註八）

（註八）我國人口中文盲者の割合は人口全體について最近に約八・五％である。獨逸では〇・〇三％である。其の他なほ此の點につき、矢野白崎共編、前掲、四二六頁參照。

一般に事物諸關係對にする知識特に技術過程に關する智識熟練技能は勞働能率の根本的契機だから、印度勞働

9) 宮城駿介譯前掲、181頁以下。

者の勞働能率が列强産業國に於けるそれに比較して大いに劣つてゐることに就ては、印度大衆一般の甚しき無學無知性といふことが、そこに一つの有力な原因として作用してゐることを疑ひ得なからう。[10] 尤も一國民の勞働能率は更に一般的社會經濟關係、企業及び經營の組織狀態、勞働者自體の體位、道德力等によつても制約されるものではあるが。

（註九）「假に日本と印度とを比較して見ると、太絲を主とする印度では勞働者一人の擔當する紡錘數は僅に一八〇錘であるのに、略同樣の事情にある日本では約四〇〇錘である。……他の大紡績國に比して、印度の紡績勞働者の能率の低劣なることは明白な事實である。」日印協會、前揭、二二三頁。

國民的産業能率の見地に於て高度の科學的技術的教育及び研究の意義を重視すべきこと勿論であり、印度に於てそれが大いに遲れてゐることを忘れてはならぬが、それよりも特に注意すべきは印度に於ける國民初等教育の驚くべき遲滯性である。今日諸列强には一般に無料且つ强制々の初等教育が普及してゐるのだが、印度には未だかゝる劃一的初等教育制度が存してゐない。かくて、今日全印度人口中五—一〇歳の兒童數略ゞ四千五百萬人と見て其の中僅に六百萬人が初等教育を授けられ、爾餘の四千萬人は何等の學校教育をも授けられずに放置されてゐる兒童大衆である。又成人教育の意義は近年諸國孰れも大いにこれを重視してゐるが、印度では又新聞雜誌講演學校等諸手段による此の種教育が非常に遲れてゐる。

（三）勞働人口に於ける勞働日の寡少及び失業の現象。印度の農民及び手工業者の間に於ける實勞働日の寡少は人的資源浪費の觀點から重視すべき一現象である。パンジャップ、ベンガル、マドラス其の他印度各地方を通じて一樣に農民が年中に於て農耕に從事する實勞働日は僅に五—八ケ月に過ぎない。爾餘の時間は碌々として遊惰に日

10) Panandikar, S., G. Industrial Labour in India, 1933, P. 214.

を暮してゐるのである。これは、勤勉努力の道德力が薄弱なること、農作規模が過小なること、經營多角化等の如き農業經營組織及び農耕勞働時間の配置を改良せざること、交通及び市場關係に障碍があること、氣候の惡條件等因つて來るところは複雜だが、とにかくそこには夥しき時間の空費がある。此の點は手工業者についても事情の同じきものがある。其の他に大規模組織の產業に於ける下級勞働者及び智識勞働者の間に於ける失業、高度異動率、同盟罷業及び工場閉出等の勞働爭議等諸社會現象に於て人的資源の大なる浪費が起つてゐる。(註一一)(註一〇)

(註一〇) 印度に於ける工業勞働者の失業は景氣の變動による他に、農村人口の大量的都市流入と產業組織の變革過程にあることが又そこで一原因を成してゐる。(Panandikar, S. G., Ibid., P. 40)

(註一一) 一般に就業異動率が極めて高い。大抵の工場では毎月全就業者數の五%が交代してゐる。即ち二年未滿に全從業者が交代する。(Ibid., P. 65)。印度に於ける勞資對立關係の尖銳化については、東亞經濟調査局、前揭、二八九頁以下及び宮城駿介譯、前揭、一二五頁以下參照。

(四)宗教の惡影響に因る國民的活力の沮喪。現今印度に行はれてゐる宗教は印度教、回教、佛教、原始教、基督教、シーク教、耆那教、拜火教、等々無數宗派に分れてゐるが、就中印度教は最も普及し今日全印度人の約三分ノ二即ち約二億人餘はこれに屬してゐる。[11] 各宗派信仰の內容的實狀は勿論夫々に特徵を持つてゐるのであるが、印度教を始め今日印度に勢力ある有力宗派の大體は通じて其の信仰內容に於ける甚しき迷信性、現世厭離性、物質蔑視性、超現實美追求性、自然順應性等に其の顯著な特質を持つてゐる。それが大衆に依る社會的關係の改善及び經濟產業の發達への努力に對して重大なる牽制的作用を成し、產業上の人間の活動乃至向上心を萎靡消磨せしめてゐる禍害は實に著しきものがある。[12]

11) 宗教については、佐野甚之助、印度及印度人、大正6年、108頁以下參照。
12) 外務省調査部、前揭、294頁參照。

（五）社會的諸弊習による國民的活力勞働力の消磨。國民的産業能率の見地から印度に於ける社會的諸弊習として注意すべきもの少くないが、特に所謂カースト制度（種姓制度）、婦人閉居制度、早婚の風習、大家族制度が指摘されなければならぬ。

（イ）カースト制度（Caste System）及びこれに附隨する爾他の諸階級制度とは婆羅門、刹帝利、吠舍、首陀の四階級及び爾他の不可觸賤民（ハリジャン）階級の五大別を基本にして、印度の社會大衆を複雜多樣無數の社會階級に分ちて相互の間に夫々貴賤上下の差別を附し、社會的經濟的交通關係、職業産業の選擇、教育享受の機會等を嚴重に制限してゐる制度であつて、今なほ牢乎として拔き難き力を持つてゐる。（註二二）此の制度は一部の特權階級を徒に虛榮傲慢怠惰に放置し他方大多數の民衆の自尊感威嚴感を失はしめ自棄の狀態にこれを追ひ込め、それが印度に於ける著しき人的資源の浪費となつてゐる。（註二三）印度の産業勞働者が此の種姓制度の爲に、一般に無智無教育なる下層階級のみから出身する事實だけを顧みても、此の印度の社會的階級制度が印度の國民的産業能率に及ぼす禍害が思半に過ぐるものあるを知らう。

（註一二）種姓制度の發生變遷の原因については學說が岐れてゐる。しかし、結局するところ、婆羅門敎即ち後の印度敎の墮落とアーリヤ民族の侵入、各種民族の混血關係といふ諸事情が主要な基本的原因を成してゐるものと考へられる。種姓制度に就ては、外務省調査部、前揭、一五頁以下、日印協會、前揭、二一頁以下、宮城駿介譯、前揭、四〇頁以下參照。

（註一三）「その大國土、大民衆を以てして他國の足下に平伏し、頗使これ從ひ而かもなほ桃源場裡長夜の惰眠を貪れるもの、定にかの種姓なる一種の閥族制度が一大原因を成してゐるに外ならないのである。」佐野甚之助、前揭、一五四頁。

（ロ）婦人閉居の制度即ちゼナナ制度（Zenana System）。これは印度に於て、其の始め回教徒家庭にのみ行はれ後

には其の影響で大部分の印度教徒の家庭にも同じくそれが普及せられて今日に至つてゐる一種の社會的風習で、結婚後の婦人に對し寺詣又は沐浴以外には一切外出を禁じ又全く他男子との面接を禁ずることを内容にしてゐる。[13] 結婚婦人の活動の自由を制限し、教育享受の機會をも奪ふところの制度が婦人の産業的貢獻を阻害し、産業から印度成年期人口の半を離脱せしめてゐる制度が如何に印度に於ける人的資源の浪費を意味してゐるか、詳しく論ずるまでもない事柄である。

(ハ)早婚の弊習。印度に於ては古來極端なる早婚の弊習が存してゐてそれは殊に女子に於て著しい。即ち女子は既に十歳以前に於て結婚乃至許婚の關係に入るものが決して少くはない。一般に印度では十二―十三歳を以て結婚適齢期であるとせられてゐる。殊にベンガル州の上流社會では九歳頃にして夫婦生活に入り十二―十三歳にして母となるものが少くないといふ例もある。[14] かゝる弊習の由來するところに就て種々論ぜられてゐるが、要するに、回教徒の侵略の影響と宗教的迷信との二元的原因に基くもののやうである。[15] 右の如き極端なる早婚の弊習に基いて起つてゐる人的資源浪費の現象は實に枚擧に遑無き程に諸方面に數へられる。男女身心の建全なる發達育成が妨げられ、殊に産業的熟練の機會が奪はれるのみならず、男子の敢爲冒險獨立の氣魄が消磨し、女子の弱體妊娠が母子双方の身心に害惡を及ぼす等は就中主要な方面である。一九二九年に法律を以て結婚期を女子一四年以上男子一六年以上に制限したのであるが、實際上此の弊習はなほ容易に改めらるべくもないやうである。

(ニ)大家族制度。古來印度には結婚後もなほ親子近親が同一家計内に生活する制度が一般に廣く行はれてをり、これは近年漸次に崩壞する傾向を示して來たとはいへ、今日もなほ大多數の印度人が此の樣式の生活を送つてゐ

13) 高岡大輔、印度の眞相、昭和8年、168頁參照。
14) 佐野甚之助、前揭、200頁。
15) 外務省調査部、前揭、297頁。

る。この制度の下で係累一般の自主獨立奮鬪の精神が萎靡衰弱せしめられ、そこに人的資源の浪費が生じてゐる害惡もまた看過し得ざる方面である。

（六）政治的隷屬性。西洋紀元前二千年アーリヤ人種が北西から侵入して來て土着原住民族と混合し、かくてそこに一應統一的に形成された印度民族は、其の後十三世紀始めになつて回教を奉ずるアラビヤ系侵略民族の確立した他民族王朝の支配下に立たせられたのであるが、[16] 爾來今日迄引續き數百年の久しき間印度は終始他民族若くは外國勢力による政治的隷屬の生活を送つて來た。しかし、印度の國民に對する外來的勢力の政治的支配が形式的にも內容的にも整備完成したのは、實は十八世紀の中葉に英國の勢力による征服が確立してからのことでそれから今日迄其の政治的隷屬性は益ゝ强化されながら續いて來てゐる。印度民族に於ける政治的隷屬性は其の支配的勢力が極端な利己的意圖から印度の經濟的、社會的諸關係に對して施す特異の壓制的諸政策の影響の爲に直接間接に重大な國民的產業能率遲滯の原因になつてゐることは勿論である。(註一四) しかし、ここでは其の政治的隷屬性そのものが直接に人的資源の浪費を惹起してゐる方面に注意せざるを得ない。卽ち、印度民族の外來的勢力に依る政治的隷屬性は國民大衆の社會的政治的經濟的奴隷化、農奴化を齎し、彼等の自主、自尊、責任感、正直、公正、努力的精神、國民的向上への希望等凡そ產業能率に於て重要な要素を成すところの貴重な諸道德性と並びに事業經營の才能等を消磨せしめてをり、それが其の儘重大な人的資源の浪費を意味してゐるのである。

（註一四）英國の征服以來、東印度會社時代、英王直轄時代、印度帝國政府時代と夫々にイギリスの對印政策の基調は變遷して來たが、終始それが印度の經濟を壓迫して土著民族の上の產業の自由にして健全な發達を阻碍して來た事情は同じいので

16）佐野甚之助、前揭、68頁以下參照。

ある。始めは黄金の流出に又民族小工業の衰頽に一つの顯著な直接的惡影響が現はれ、後に又英人資本の偏頗的保護と民族大産業の發達への妨礙とに又一つの重要な直接的惡影響が齎らされてゐる。東亜經濟調査局、前掲、及び宮城駿介、前掲、並に松原宏譯、イギリス帝國主義下の印度昭和十年等參照。

四　國民的資本の浪費

謂ふところの國民的資本とは貯蓄された過去の國民的生産果實價値にして爾後の國民的再生産に於ける要素として機能し得べき性質の力のことである。先づ印度に於ける國民的資本の形成如何が問題にならう。國民的資本は國家内に形成される總所得價値から國家内にて純粋に消費される價値部分を差引きたる殘餘價値によつて形成せられるものである。成程、印度大衆の大部分の所得は極めて低い。(註一五) 印度の都市大工業經營の賃銀勞働者は月平均として大體二〇ルーピー内外の所得を得てゐるやうであるが、栽培園地帶の勞働者の所得はそれよりも遙に低く月平均一〇ルーピー内外である。[17]

(註一五) 内閣統計局、列國々勢要覽は一九二三年の直轄英領地印度の國民所得人口一人當りを當該年度の平均爲替相場を以て換算して九十六圓と記してゐる。しかし、今の場合、此の種數字の語る國民所得の低位其のものを直接に指してゐるのではない。

しかし、全印度生産業者數の約七割を占めてゐる農業に於ける一般從業者の所得は右栽培園勞働者のそれと同位又は一層低位であることが確であるから、依て以て一般的印度大衆の所得の如何に零細であるかは容易に推定がつかう。だが、國民所得の分配に不平均があり、又それと資本主義獨特の機構とに基いて、如何に大衆生活に

17) Panandikar, S. G., Ibid. 191—192、及び宮城駿介譯前掲134頁以下並びに松原宏譯前掲第三章參照。

極端なる窮迫があつても、他方では貯蓄が行はれ、かくて印度にもまた國民的生產果實の殘餘價値たる國民的資本の形成が他國に於けると同じく行はれてゐるのである。ただ、國民的資本の保存利用に就て印度には特殊の事情に基き他國に見ざる甚しき浪費が多年行はれて來てゐるのである。此の國民的資本の保存利用に於ける非能率性は主として以下に見る四方面に現はれてゐる。

(一)形成資本の國外流出。印度が英本國の財政的產業的地盤に對して有力な一支柱になつてゐることは周知のところである。それを正確に計算することは困難であつても現舊在印英國人官吏及び產業使用人の俸給乃至恩給の本國送金、投下資本利潤、公債、其の他の貸付金利子の送金等凡そ印度にて形成される國民的所得の消費外餘剩分卽ち印度內形成の國民的資本のイギリスへの流出分だけでも每年數億ルーピーに達するといふことを示す計數が擧げられてゐる[18]。これらの中には印度へのイギリスからの再投資によつて相殺される部分もあるのであるが、(註一六)しかし、約一世紀半の久しきに亙る印度國民資本の對英流出額がイギリスの對印投資を超過すること莫大なるは容易に推定され得べき疑無き事實である。これは實に印度の國民的資本の保存利用に於ける顯著なる浪費である。

(註一六)今日印度產業の重要なものは大部分がイギリス資本の下にある。其の他にイギリス人の手には諸種の印度公債が多額に所有されてゐる。それらの投資額に就ては種々なる推定がある。(東亞經濟調査局、前揭、二九頁)。商工交通事業へのイギリス人投資額總計は二億九千五百萬磅といふ推定もある。

(二)形成資本の動員上の缺陷。形成された國民的資本が投下されて現實に生產上の基礎的手段たらしめられずに

18) 東亞經濟調査局、前揭、27頁以下及び宮城駿介譯、前揭、122頁參照。

ゐるといふことは、資本浪費の一方面を成す。此の種の資本浪費が今日迄印度に於て起つてゐること實に夥しいと推定される。印度が一八七二年より一九二九年にかけて生產と輸入とから國內に吸收してゐる金總額は實に六十六億六千萬ルーピーと推定されてゐる。其の一部が爲替調節資金となり又實用工藝乃至產業上に資材として利用されてゐるにしても、其の大部分は奢侈品又は死藏財產として徒に生產界から離脫してゐるのである。[19]

(三)資本使用の方法に於ける遲滯性。土着民族產業は農工業を通じて一般に其の生產手段及び經營の組織に於ける遲滯性が實に著しくて數百年來の傳統を固執して近代的科學の成果を應用せる合理的な改良進步の跡を殆んど全く示してゐないのである。今日でも未だ數千年前のそれと同じい極端な舊式道具を少しの改良も加へずに其の儘で使用してゐる經營が大部分だといふ有樣である。そして、近代的大經營の多くが主として英國系資本の下にあるから、土着資本の現實に產業上に機能してゐる部分は多くは前記の如き非合理的樣式の經營狀況の上で使用されてゐるのである。殊に注意すべきは農業經營に於ける誤つた資本使用方法が齎す浪費の重大性である。印度の農業經營では宗教的偏見の爲に生物殊に家畜の屠殺を忌避する事と、極端に零細な經營規模の爲に耕耘動力として主として家畜に依賴する必要がある事とから、自然に過多の家畜を農家に飼養するといふ弊態が普遍してゐることが、非常なる資本の浪費を意味してゐる。更に農家經濟が一般に家畜の糞を燃料に使用してゐて肥料としてこれを用ゆることなく、他方人造肥料購入の資力もなきが儘施肥といふことを殆んど行はずに掠奪耕作を續けてゐるといふ狀態は、副產物利用の道を誤つたもので、ここに又一種の潛在的資本の浪費がある譯である。かくて一般に產業上、其の技術に關し、經營組織に關し、社會經濟的組織に關して近代的科學性の應用が極めて乏し

19) Rajani Kanta Das, The Industrial Efficiency in India, 1930, P. 43.

くなつてをり、牽いて投下資本が充分に其の效果性を發揮し得るに至らなくて生産費、經營費過大の現象を惹起してゐるといふことは、實に重要な資本浪費を成してゐる譯である。

(四)投下資本の高度遊閑化。農業經營及び小規模工業經營は印度産業の重要な要素を成してゐる。然るに、これらの經營に於ける操業時間が極めて短く遊閑時間が過大になつてゐるといふことは、畢竟そこに投ぜられてゐる資本の高度遊閑化であり注意すべき資本浪費を意味するものである。

五　結　言

印度は東亞の一重要地帶である。それは將來に於ける東亞の全面的更生に於て極めて重要な役割を演ずべき世界史的使命を負つてゐる。然るにそれが今日迄のところ、そこに與へられてゐる産業上の莫大な自然的、人的、資本的資源に就て如何に高度の浪費を犯してゐるか、現に如何に印度の國民的産業能率が遲滯してゐるか。此の重要な問題に就て、此の一小文は甚だ不充分ながら概要的事實關係を明かにし得たと思ふ。如何なる根本的因緣から斯の如く著しき程度に及ぶ國民的産業能率の遲滯性が今日迄の印度に於て惹起されて來たのであるか。而して、如何なる方策が其の救濟改善の爲に可能にして必要であるか。更に既に同國に於て如何なる改善方策又は改善運動が着手實行乃至計劃されつゝあるか。これらが、又極めて興味あり且つ又極めて重要な問題になるのであるが、本文に於ては紙數の關係もあつて、全くこれには論及することが出來なかつたのである。しかし、若し、此の小文が今日の時局處理に關して何等かの示唆を與へることが出來、而して又種々なる意味で現代印度の研究

が今後我國に於て更に益々進み行くべき道程上の一資料ともならば、そは實に望外の幸であるとせねばならぬ。

此の小文の作成が依據したる參考文獻は以下列記のもので、其の中の多くが京都帝國大學經濟學部東方經濟研究室の所藏にかゝる。

日印協會、印度產業貿易狀勢、昭和十年。

外務省調査部、印度民族史、昭和十年。

東亞經濟調査局、イギリスの印度統治、昭和十年。

名和統一、日本紡績業と原棉問題研究、昭和十二年。

佐野捷之助、印度及印度人、大正六年。

高岡大輔、印度の眞相、昭和八年。

三菱經濟研究所、太平洋に於ける國際經濟關係、昭和十二年。

宮城駿介譯、壓制下の印度、昭和十三年。

松原宏譯、イギリス帝國主義下の印度、昭和十年。

今村忠男譯、印度の產業と關稅、昭和九年。

內閣統計局、列國々勢要覽、昭和十二年。

矢野自崎編、日本國勢圖會、昭和十三年。

Rajani Kanta Das, The Industrial Efficiency in India 1930,

Panandikar, S. G., Industrial Labour in India 1933,

Lokanathan, P. S., Industrial Organization in India 1935,

Dantwala, M. L., Marketing of Raw Cotton in India 1937,

The World Almanac, 1938,

The Encyclopaedia Britannica 14th Edit. item India,

Nalagopal Das, Industrial Enterprise in India 1938.